2019 (令和元) 年度 共同利用研究 • 研究成果報告書

研究課題名 和文: KAGRA データ転送・保管系の構築 (5)

英文: Construction of KAGRA data transfer and storage system (5)

研究代表者 神田展行(大阪市立大学)

参加研究者 伊藤洋介(大阪市立大学),澤田崇広(大阪市立大学),土田怜(大阪市立大学),富上由基(大阪市立大学),大原謙一(新潟大学),坂井佑輔(新潟大学),根岸諒(新潟大学),高橋弘毅(長岡技術科学大学),上島元(長岡技術科学大学),酒井一樹(長岡工業高等専門学校),三代木伸二(東京大学),田越秀行(東京大学),宮川治(東京大学),山本尚弘(東京大学),横澤孝章(東京大学),灰野禎一(中央研究院Academia Sinica)

研究成果概要

本研究は、重力波観測実験 KAGRA のデータ転送・保管系を運用するものである。 2019 年度の研究では、特に、データ転送系を延長し、海外の他の重力波観測とのデータ 共有と、国内外の KAGRA 共同研究者へのデータ配送を行った。これは、KAGRA が国際重力波観測網として機能し、重力波マルチメッセンジャー天文の研究を推進するため に不可欠なものである。

2019 年には、低遅延データ系として、データを1秒間ごとにフォーマットし、常にKAGRA 検出器サイト(神岡、KAGRAトンネル坑内)から柏へ転送している。さらにこのデータは、柏と米国カリフォルニア工科大(CIT)間で双方向の送受信が動作し、常に最新の観測データの共有がおこなわれるようになった。図1は、柏のKAGRA

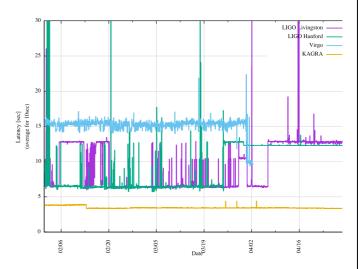


図1: KAGRA と海外重力波観測実験との間のデータ遅延量

主データサーバにおける、共有データの遅延量の 2020 年 2 月 \sim 4 月(KAGRA の観測 運転期間を含む)の履歴である。

遅延量はネットワーク中の転送時間だけでなく、各検出器における時空の歪み h(t)へのフィルタ計算やデータ質フラッグの付与などの時間も含まれ、検出装置からサーバ上で得られるまでの実効時間である。KAGRA のもので平均 3.5 秒、もっとも遅延の大きい Virgo のものでも 15 秒程度で届いている。この低遅延データは、さらに、KAGRA の解析パイプラインが動作する 2 つのクラスタ計算機(コンパクト連星用、バースト用)

と大阪市大および東大本郷のクラスタ計算機にも送信されている。またこの低遅延データは、4096 秒毎にマージされて保管されている。低遅延のデータはネットワーク状態などに起因するトラブルや、リアルタイムのために h(t)の評価をある程度以上詰められないという問題がある。そのため LIGO, Virgo とのデータ交換は、低遅延データだけでな

く、マージされたデータを用いた高遅延 データ転送も必要である。LIGO,Virgo の 協力を得て、Rucio と呼ばれるソフトウ エアによる転送を開始した。

また KAGRA の観測運転中にデータ転送状況を監視するための web 経由のモニターも整備された(図 2)。従来はログイン端末から監視していたが、web 化により全ての共同研究者が楽に把握できるようになった。

KAGRA の海外コラボーレーター拠点についてのデータ配布も重要事項である。台湾中央研究院(Academia SINICA)は KAGRA の Tier-1 であり、フルデータ送信は以前から行われていたが、2019年度も引き続き維持された。さらに、韓国KISTIにおいても Tier-1 になるべく準備中である。今回、我々で開発した rsync ベースのソフトウエアを利用して、柏からKISTI への転送も常時行うようになった。

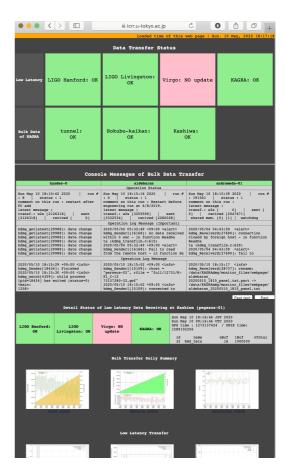


図 2: データ転送状況 web モニタ

最近の発表論文・研究会発表

- 「KAGRA 観測運転に向けたデータ解析計算機資源とソフトウェアの整備」大原謙一, KAGRA Collaboration, 日本物理学会 2019 年秋季大会, 2019 年 9 月 19 日
- 「KAGRA データ転送・保管系の観測運転に向けた構築と整備」神田展行, KAGRA collaboration, 日本物理学会 2019 年秋季大会, 2019 年 9 月 18 日
- 「KAGRA 観測運転におけるデータ転送・保管システムの運用状況」土田怜, KAGRA Collaboration, 日本物理学会 第 75 回年次大会(2020 年) 2020 年 3 月 16 日

整理番号 F04